

平成18年度弁理士試験論文式筆記試験問題

〔著作権法〕

Aは中学受験指導を主たる業務とする予備校である。Aは、自校で国語の指導を行っている教師Bに私立中学受験対策用の漢字ドリルを作成させ、これを一般に販売している。Aの発行した漢字ドリルは、各頁ごとに完結した独立の問題として構成されており、各頁には10題ずつ漢字の読取り、書取りの問題が掲載されている。ドリルの分量は全体で100頁程度のものである。小学校の教師であるCは、自己が担当する6年生の国語の授業時間中に、定期的に漢字の小テストを行うため、そのドリルの中から毎回、適宜、1頁を選び出し、これをコピーして生徒に配布した。Cが行った小テストは全部で10数回程度である。Cは、小テスト実施後、その答案を添削して生徒に返却し、その講評や解説を行うと共に、小テストの点数を各期末の国語の成績をつける際に考慮することとしている。

以上の事実関係の下で、AがCに対して著作権侵害の主張を行った場合、Cはどのような反論をなし得るか、論じなさい。

【50点】

論点 [著作権法]

- 1 . 著作物性 (2 条 1 項 1 号 ・ 12 条) の有無を問う
- 2 . 職務著作 (15 条) の成否を問う
- 3 . 著作権の制限規定 (35 条、 36 条) を問う